

若い木霊

宮沢賢治

青空文庫

〔冒頭原稿数枚なし〕

「ふん。こいつらがざわざわざわ云っていたのは、ほんの昨日のようだったがなあ。大抵たいてい雪つぶに潰つぶされてしまったんだな。」
それから若い木霊こだまは、明るい枯草かれくさの丘おかの間を歩いて行きまし
た。

丘くぼの窪くぼみや皺しわに、一きれ二きれの消え残りの雪が、まっしろにかがやいて居おります。

木霊はそらを見ました。そのすきとおるまっさおの空で、かすかにかすかにふるえているものがありました。

「ふん。日の光がふるふるやうやうやがる。いや、日の光だけでも

ないぞ。風だ。いや、風だけでもないな。何かこう小さなすきとおる蜂すがるのようなやつかな。ひばりの声のようなもんかな。いや、それでもないぞ。おかしいな。おれの胸までどきどき云いやがる。ふん。」

若い木霊はずんずん草をわたって行きました。

丘のかけに六本の柏かしわの木が立っていました。風が来ましたのでその去年の枯れ葉はザラザラ鳴りました。

若い木霊はそっちへ行って高く叫さけびました。

「おおい。まだねてるのかい。もう春だぞ、出て来いよ。おい。ねぼうだなあ、おおい。」

風がやみましたので柏の木はすっかり静まってカサツとも云い

ませんでした。若い木霊はその幹に一本ずつすきとおる大きな耳をつけて木の中の音を聞きました。がどの樹きもしんとして居りました。そこで

「えいねぼう。おれが来たしるしだけつけて置こう。」と云いながら柏の木の下の枯れた草穂くさほをつかんで四つだけ結び合いました。そして又またふらふらと歩き出しました。丘はだんだん下つて行って小さな窪地になりました。そこはまつ黒な土があたたかにしめり湯気はふくふく春のよろこびを吐はいていました。

一疋の墓びまひきがそこをのそのそ這はつて居りました。若い木霊はギクツとして立ち止まりました。

それは早くもその墓ことばの語を聞いたからです。

「鶉とぎの火だ。鶉の火だ。もう空だつて碧あおくはないんだ。

桃ももいろ色のペラペラの寒天でできているんだ。いい天気だ。

ぽかぽかするなあ。」

若い木霊の胸はどきどきして息はその底で火でも燃えているように熱くはあはあするのでした。木霊はそつと窪地をはなれました。次の丘には栗くりの木があちこちかがやくやどり木のまりをつけて立っていました。

そのまりはとんぼのはねのような小さな黄色の葉から出来ていました。その葉はみんな遠くの青いそらに飛んで行きたそうでした。

若い木霊はそつちに寄つて叫びました。

「おいおい、栗の木、まだ睡ねむってるのか。もう春だぞ。おい、起きないか。」

栗の木は黙だまってつめたく立っていました。若い木霊はその幹にすきとおる大きな耳をあててみました。が中はしんと何の音も聞こえませんでした。

若い木霊はそこで一寸ちよつと意地悪く笑って青ぞらの下の栗の木の梢こすえあおを仰いで黄金色きんのやどり木に云いました。

「おい。この栗の木は貴様らのおかげでもう死んでしまったようだよ。」

やどり木はきれいにかがやいて笑って云いました。

「そんなこと云っておどそうたって駄目だめですよ。睡ねむってるんです。」

よ。僕^{ぼく}下りて行つてあなたと一^{いっしょ}緒に歩きましょうか。」

「ふん。お前のような小さなやつがおれについて歩けると思ふのかい。ふん。さよならつ。」

やどり木は黄金色のベそをかいて青いそらをまぶしそうに見ながら「さよなら。」と答えました。

若い木霊は思わず「アハアハハ」とわらいました。その声はあおぞらの滑^{なめ}らかな石までひびいて行きましたが又それが波になつて戻^{もど}つて来たとき木霊はドキツとしていきなり堅^{かた}く胸^{おさ}を押えました。

そしてふらふら次の窪地にやつて参りました。

その窪地はふくふくした苔^{こけ}に覆^{おお}われ、所々やさしいかたくりの

花が咲いていました。若い木だまにはそのうすむらさきの立派な花はふらふらうすぐろくひらめくだけではつきり見えませんでした。却^{かえ}つてそのつやつやした緑色の葉の上に次々せわしくあらわれては又消えて行く紫^{むらさきいろ}色のあやしい文字を読みました。

「はるだ、はるだ、はるだの日がきた、」字は一つずつ生きて息を ついて、消えてはあらわれ、あらわれては又消えました。

「それでも、つちでも、くさのうえでもいちめんいちめん、ももいろの火がもえている。」

若い木霊ははげしく鳴る胸を弾^{はじ}けさせまいと堅く堅く押えながら急いで又歩き出しました。

右の方の象の頭のかたちをした灌^{かんぼく}木の丘からだらだら下りに

なつた低いところを一寸越こしますと、又窪地がありました。

木霊はまつすぐに降りて行きました。太陽は今越えて来た丘のきらきらの枯草の向うにかかりそのななめなひかりを受けて早くも一本の桜草が咲いていました。若い木霊はからだをかがめてよく見ました。まことにそれは蛙かえるのことばの鶉うずらの火のようにひかつてゆらいで見えたからです。桜草はその靱しなやかな緑色の軸じくをしずかにゆすりながらひとの聞いているのも知らないで斯こうひとりごとを云っていました。

「お日さんは丘の髪の毛かみけの向うの方へ沈しずんで行ってまたのぼる。

そして沈んでまたのぼる。空はもうすっかり鶉うずらの火になつた。

さあ、鶉うずらの火になつてしまった。」

若い木霊は胸がまるで裂けるばかりに高く鳴り出しましたので
びつくりして誰かたれに聞かれまいかとあたりを見まわしました。そ
の息は鍛冶場かじばのふいごのよう、そしてあんまり熱くて吐いても吐
いても吐き切れないのでした。

その時向うの丘の上を一足びきのとりがお日さまの光をさえぎって
飛んで行きました。そして一寸からだをひるがえしましたのでは
ねうらが桃色にひらめいて或いあるはほんとうの火がそこに燃えてい
るのかと思われました。若い木霊の胸は酒アルコール精で一ぱいのよう
になりました。そして高く叫びました。

「お前は鶉という鳥かい。」

鳥は

「そうさ、おれは鶉だよ。」といいながら丘の向うへかくれて見えなくなりました。若い木霊はまっしぐらに丘をかけのぼって鳥のあとを追いました。丘の頂上に立つて見るとお日さまは山にはいるまでまだまだ間がありました。鳥は丘のはざまの蘆あしの中に落ちて行きました。若い木霊は風よりも速く丘をかけおりて蘆むらのまわりをぐるぐるまわって叫びました。

「おおい。鶉。お前、鶉の火というものを持つてるかい。持つてるなら少しおらに分けて呉くれないか。」

「ああ、やろう。しかし今、ここには持っていないよ。ついておいで。」

鳥は蘆の中から飛び出して南の方へ飛んで行きました。若い木

霊はそれを追いました。あちこち桜草の花がちらばっていました。そして鳥は向うの碧いそらをめがけてまるで矢のように飛びそれから急に石ころのように落ちました。そこには桜草がいちめん咲いてその中から桃色のかげろうのような火がゆらゆらゆら燃えてのぼって居りました。そのほのおはすきとおってあかるくほんとうに呑みたくらいでした。

若い木霊はしばらくそのまわりをぐるぐる走っていましたがつとうとう

「ホウ、行くぞ。」と叫んでそのほのおの中に飛び込みました。

そして思わず眼めをこすりました。そこは全くさつきひきがえる墓がつぶやいたような景色でした。ペラペラの桃色の寒天で空が張られまっ

青な柔らかな草がいちめんでその処々ところどころにあやしい赤や白のぶちぶちの大きな花が咲いていました。その向うは暗い木立で怒鳴りや叫びががやがや聞えて参ります。その黒い木をこの若い木霊は見たことも聞いたこともありませんでした。木霊はどきどきする胸を押えてそこらを見まわしましたが鳥はもうどこへ行つたか見えませんでした。

「鶉、鶉、どこに居るんだい。火を少しお呉れ。」

「すきな位持っておいで。」と向うの暗い木立の怒鳴りの中から鶉の声がしました。

「だってどこに火があるんだよ。」木霊はあたりを見まわしながら叫びました。

「そこらにあるじゃないか。持つといで。」鶉が又答えました。
木霊はまた桃色のそらや草の上を見ましたがなんにも火などは
見えませんでした。

「鶉、鶉、おらもう帰るよ。」

「そうかい。さよなら。えい畜生。スペイドの十を見損つ
ちやつた。」と鶉が黒い森のさまざまのどなりの中から云いまし
た。

若い木霊は帰ろうとしました。その時森の中からまつ青な顔の
大きな木霊が赤い瑪瑙めのうのような眼玉をきよろきよろさせてだんだ
んこつちへやって参りました。若い木魂こだまは逃にげて逃げて逃げまし
た。

風のように光のように逃げました。そして丁度前の栗の木の下に來ました。お日さまはまだまだ明るくかれ草は光りました。

栗の木の梢こずえからやどり木するとが鋭く笑つて叫びました。

「ウワーイ。鶯にだまされた。ウワーイ。鶯にだまされた。」

「何云つてるんだい。小びやつこ。ふん。おい、栗の木。起きろい。

もう春だぞ。」

若い木霊は顔のほてるのをごまかして栗の木の幹にそのすきとおる大きな耳をあてました。

栗の木の幹はしいんとして何の音もありません。

「ふん、まだ、少し早いんだ。やっぱり草が青くならないとな。

おい。ぴやつ小こ、さよなら。」若い木霊は大分西に行った太陽にひら

りと一ぺんひらめいてそれからまつすぐに自分の木の方に向け戻りました。

「さよなら。」とずうつとうしろで黄金^{きん}色のやどり木のまりが云っていました。

青空文庫情報

底本：「ポラーノの広場」新潮文庫、新潮社

1995（平成7）年2月1日発行

1997（平成9）年5月25日3刷

※「木霊」と「木魂」の混在は、底本通りです。

入力：土屋隆

校正：うてな

2005年3月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

若い木霊

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>